国際仏教学大学院大学研究紀要
第 12 号（平成 20 年）

Journal of the International College
for Postgraduate Buddhist Studies
Vol. XII, 2008

ヴェーダ祭式における痛みに対する共感について

伊　澤　敦　子

ヴェーダ祭式における痛みに対する共感について

伊澤敦子

1

ヴェーダ祭式における殺生行為については、外部からの批判の対象となっていただけでなく、内部にあっても動揺を引き起こしていたというのは既に指摘されていることである。その動揺は、恐れ fear[1]、当惑 embarrassment と表現され[2]、それを受けて、Schmithausen は当惑の一側面として恐れに注目した。彼は更に、仏教において僧侶は一切生類に対する関心又は慈悲深い同情 concern or merciful sympathy（dayā）と心遣い caring（anukampā）から殺生を避けるが、これらの感情は共感 empathy が基礎になっていると見なす。そして、初期のジャイナ教や仏教そしてヴェーダ後のヒンドゥー教において、ahiṃsā の動機として少なくとも次の 2 点を想定する。即ち、

1. この世やあの世における悪報の指摘。主なる感情は恐れ。Bhṛgu の物語（ŚB 11.6.1, JB 1.42-44）に代表される。
2. 黄金律。主なる感情は共感。

一見まったく相容れないように思えるこれら 2 つの動機について Schmithausen は、実は共通の背景から派生したものと結論付ける。即ち、Bhṛgu の物語に見られる考え方（犠牲になったものは加害者に報復する）は少なくとも共感と思われる感情を前提としている、というものである[3]。

ahiṃsā の動機として恐れや不安といった感情に焦点が当てられてきた

---

1 Schmidt 1968, p. 655

2 Houben, p. 117ff.

3 Schmithausen, p. 254ff.

従来の議論の中にあって[4]、この Schmithausen の指摘は極めて示唆に富んでいる。彼は更に共感に注目するが、常に当惑や恐れの感情と同一視して、或いは並べて論じている[5]。

Schmidt は ahiṃsā の起源を論じるにあたって、ヴェーダ文献の例をいくつか挙げており、その中には Saṃhitā も多く含まれているが、Brāhmaṇa との区別は考慮されていない。そして祭式主義者をアニミストと看做すが、そこから直ちに Bhṛgu の物語との関連で報復の恐れから来る殺傷行為への不安を導き出す[6]。

このように Brāhmaṇa にあっては恐れや当惑と同根であり、仏教に至ると倫理的な色彩を帯び、慈悲心のもととなる共感であるが、ではヴェーダ文献の中でも Saṃhitā ではどうであろうか。ahiṃsā の起源が仏教でもジャイナ教でもヴェーダでもなく、もっと太古の共通の源泉に遡るとの説に従うならば[7]、Saṃhitā の中にもその痕跡を辿れるかもしれない。本稿では必ずしも ahiṃsā に囚われずに Saṃhitā（黒ヤジュル・ヴェーダ）を中心に共感—ここでは特に痛みへの共感—について検討するつもりである。

2

Schmidt がヴェーダ文献から挙げているいくつかの例は、祭式における殺生等を打ち消すための方策として 2 つに大別できる。これらを仮に AB とするなら、

4　Alsdorf, p. 571, Schmidt 1968, p. 645, 655.

5　この共感は殺傷に伴う恐れ或いは単なる当惑として現れているかもしれない。何らかの理由で報復に対する祭式の保護が破棄されたり不十分と見做されたりした時、恐れは真の ahiṃsā を齎したのだろう。しかし殺生に際しての当惑または共感が弾みを得て、真の共感（最早祭式者の言い逃れが受け入れられる余地がなく、慈悲の概念（dayā）と黄金律に見られる）へと発展していったことで、生活様式の基本的な要素としての真の ahiṃsā が出現した（少なくとも高められた）という可能性も除外できない（Schmithausen, p. 276 より）。

6　Schmidt 1968, pp. 645-649, 1997 p. 214.

7　Alsdorf, p. 609ff., Schmidt 1997, pp. 207, Tsuchida, p. 430.

A―文言によるもので、曰く、祭火に捧げられた犠牲獣は祭火から再生される（ŚB 11.1.2.1-2）、犠牲獣は死に至るのではなくて神々に至るのである（RV 1.162.21）、犠牲獣は死ではなく祭式に導かれる（ŚB 3.8.1.10）。

B―殺生や傷害をすぐさま除去する手段―鎮め（śānti）―や、傷害を回避するためのシンボリックな同一化の考え方による解決法の提示である[8]。

A については Schmidt によって例に挙げられた ŚB 3.8.1.10 とそれに対応する TS 6.3.8.1-2 を検討する。

B において、Schmidt は供犠のみならず祭式に際してのいかなる種類の傷害も考慮に入れられている、としていくつかの例を挙げている。その中には殺生された動物の痛みから、木、大地、穀物等に与えた傷害の鎮めまで含まれている。具体的にどのように鎮めるのかを見るために、例の一つとして挙げられている殺生された動物の痛みの鎮めについての記述（MS 3.10.1）を以下に示す。その後で、殺生以外の原因で引き起こされる痛みの回避の方法が提示されている箇所を検討する。

① MS 3.10.1 (128.11-129.1), TS 6.3.9.1, ŚB 3.8.2.4
② TS 5.1.5.1, KS 19.5 (5.10-11)＝KapS 30.3 (140.17-18)), MS 3.1.5 (7.1-2), ŚB 6.4.3.1-5
③ TS 5.1.4.2, MS 3.1.5 (6.7-8)
④ TS 5.1.6.1-2, KS 19.5-6 (6.14-7.2)＝KapS 30.3-4 (141.16-22)
⑤ TS 5.2.9.5-6, KS 20.8 (27.19-28.3)＝KapS 31.10 (158.9-15), MS 3.2.7 (27.8-10), ŚB 7.5.2.28-37

A と B ①はソーマ祭の動物供犠からで、B ②～⑤はアグニチャヤナの ukhā 作りからである。

A. ŚB 3.8.1.10, TS 6.3.8.1-2

ŚB 3.8.1.10

tád āhuḥ | naìṣá yájamānenānvārábhyo mṛtyáve hy ètáṃ náyanti tásmān nānvárabhetéti tád ánv evárabheta ná vā́ etáṃ mṛtyáve náyanti yáṃ yajñā́ya

[8] TS 6.3.3.2, 6.3.4.1, KS 26.5, MS 3.1.8, 3.2.3, 3.9.3, 3.10.1, ŚB 1.2.2.11, 14, 6.5.3.9

náyanti tásmād ánv evárabheta yajñád u haivàtmánam antáriyād yán nǎnvārábheta tásmād ánv evárabheta tát paró ’kṣam anvárabdhaṃ bhavati vapāśrápaṇībhyāṃ pratiprasthātā́ pratiprasthātáram adhvaryúr adhvaryúṃ yájamāna etád u paró ’kṣam anvárabdhaṃ bhavati

(10) それに関して彼らは言う。「これは祭主によって後ろから摑まれるべきではない。何故なら、彼らはこれを他ならぬ死に導くので。それ故、後ろから摑むべきではない」と。だが、後ろから摑むべきである。彼らはこれを祭式に導くのであって、死に導くのではないので。それ故、まさしく後ろから摑むべきである。もし後ろから摑まないなら、彼は実に自身を祭式から離してしまうだろう。それ故、まさしく後ろから摑むべきである。それはひそかに後ろから摑まれている。2つの腸間幕用の二股フォークによって pratiprasthātṛ 祭官が、pratiprasthātṛ 祭官を adhvaryu 祭官が、adhvaryu 祭官を祭主が。この様にひそかに後ろから摑まれている。

TS 6.3.8.1-2

.... brahmavādíno vadanty anvārábhyaḥ paśúr nánvārábhyā íti mṛtyáve vā́ eṣá nīyate yát paśús tám yád anvārábheta pramā́yuko yájamānaḥ syād átho khálv āhuḥ suvargā́ya vā́ eṣá lokā́ya nīyate yát ‖ 1 ‖ paśúr íti yán nánvārábheta suvargál lokā́d yájamāno hīyeta vapāśrápaṇībhyām anvārabhate tán né ’vānvárabdhaṃ né ’vānanvárabdham...

(1)・・・ヴェーダ論者達は言う。「犠牲獣達は後ろから摑まれるべきか否か？」と。犠牲獣であるこれは、実に死へと導かれる。もしそれを後ろから摑むなら、祭主は死んでしまうだろう。或いはまた彼らは言う。「犠牲獣であるこれは実に天界に導かれる」と。

(2) もし後ろから摑まないなら、祭主は天界から閉め出されてしまうだろう。2つの腸間幕用の二股フォークで後ろから摑むべし。それが摑まれているかのようでもあり、摑まれていないようでもある。

TS においては、「犠牲獣は死へと導かれる」とはっきり言った上で、「或いはまた彼らは『犠牲獣は天界に導かれる』と言う」、と2つの意見が示

されているが、この２つの間で揺れ動いている様子が、「それが摑まれているかのようでもあり、摑まれていないようでもある」という表現によってうかがえる。ŚB は前者の意見を否定して、犠牲獣は祭式に導かれるのであって、死に導かれるのではない、と宣言している。

B. ①　殺生された動物の痛み。Schmidt が挙げている例で、TS と ŚB に対応する表現が見られる。MS 3.10.1 (128.11-129.1), TS 6.3.9.1, ŚB 3.8.2.4

MS 3.10.1 (128.11-129.1)

paśór vaí māryámāṇasya prāṇáñ súg ṛchati yád áha vácam asya mā́ hiṁsīḥ prāṇám asya mā́ hiṁsīr íty adbhír vā́vāsyaitát prāṇáñ śucó muñcati yát te krūráṁ yád ástithitaṃ tád eténa śundhasva devébhyaḥ śumbhasvéti yád evā́sya gamáyantaḥ krūrám akraṁs tád ákrūram akas táñ śamayati yé vā́ eté stoká avapádyante tá imā́m áśāntā ṛchanti táta imā́ñ súg ṛchati yád áha śám adbhyá íti śamáyaty evá śāntā́ evémā́m ṛchanty áhiṁsāyai

実に殺されつつある動物の諸プラーナに痛みが達する。この様に言う、「これの声を傷つけるな。これのプラーナを傷つけるな」と。実にこの様に水でこれの諸プラーナを痛みから解放する。「汝の何が傷つけられようと、何が止められようと、それをこれにより清めよ。神々のために美しくせよ」と唱える。即ち、逝かせる者達がこの者の何を傷つけても、彼はそれを無傷にした。それを鎮める。実にこれら水の雫が垂れると、それら不穏がこの（大地）に達する。それからこの（大地）に痛みが達する。「水に幸いあれ」と言って鎮める。即ち、鎮められた（水）がこの（大地）に達する。傷つけない為に。

TS 6.3.9.1

paśór vā́ álabdhasya prāṇáñ chúg ṛchati vák ta ā́ pyāyatām prāṇás ta ā́ pyāyatām íty āha prāṇébhya evā́sya śúcaṁ śamayati sā́ prāṇébhyó ’dhi pṛthivī́ṁ śúk prá viśati śám áhobhyām íti ní nayaty ahorātrā́bhyām evá pṛthivyaí śúcaṁ śamayaty óṣadhe tráyasvainaṁ svádhite máinaṁ hiṁsīr íty

āha vájro vaí svádhitiḥ ‖ 1 ‖ śántyai...

(1) 実に動物が捧げられるとその諸プラーナに痛みが達する。「あなたの声が膨らむように。あなたのプラーナが膨らむように」と言う。即ち、これの諸プラーナから痛みを鎮める。その痛みは諸プラーナから大地に入る。「昼達に幸いあれ」と。注ぐ。即ち、昼夜の間に大地の為に痛みを鎮める。「草よ、それを守れ。斧よ、それを傷つけるな」と言う。斧は実にヴァジュラ。鎮めの為に。

ŚB 3.8.2.4

átha paśóḥ prāṇán adbhíḥ pátny úpaspṛśati | tád yád adbhíḥ prāṇán upaspṛśáti | jīváṃ vaí devánāṁ havír amṛ́tam amṛ́tānām áthaitát paśúṃ ghnanti yát saṃjñapáyanti yád viśásaty ápo vaí prāṇás tád asminn etán prāṇán dadhāti táthaitáj jīvám evá devánāṁ havír bhávaty amṛ́tam amṛ́tānām

次に動物の諸プラーナに妻が水を振り掛ける。諸プラーナに妻が水を振り掛けるのは何故か―神々の供物は生きている。不死たちの為の不死。そして彼らは同意させること、切ることで、この様に動物を殺す。諸プラーナは実に水。それでこれにこれらの諸プラーナを置く。その様に神々の供物は正に生きたものになる。不死たちの為の不死になる。

TS では動物が捧げられる（álabdhasya）と表現されているのに対し、MS では殺されつつある（māryámāṇasya）という露骨な表現が用いられている。ここで問題にされているのは殺生行為に対する後ろめたさではなく、それによって動物にもたらされた痛みである。一方 ŚB には殺す（ghnanti）という言葉が使用されている[9]。そして、水を振り掛けるのは痛みを鎮

9 ŚB 11.1.2.1 では殺す（ghnanti）という語が何度も繰り返されている。
ghnánti vā́ etád yajñám | yád enaṃ tanváte yán nv èvá rā́jānam abhiṣuṇvánti tát táṃ ghnanti yát paśúṁ saṃjñapáyanti viśásati tát táṃ ghnanty ulūkhalamusalā́bhyāṃ dṛṣadupalā́bhyāṁ haviryajñáṃ ghnanti
彼らは祭式を広げる時、実にそれを殺しているのだ。更にまた彼らはソーマ王を絞る時、それを殺しているのだ。動物を同意させ、切る時、それを殺しているのだ。

める為ではなく、動物を不死のものにする為である

② 大地の痛み

TS 5.1.5.1, KS 19.5 (5.10-11)=KapS 30.3 (140.17-18)), MS 3.1.5 (7.1-2), ŚB 6.4.3.1-5

TS 5.1.5.1[10]

krūrám iva vā́ asyā etát karoti yát khánaty apá úpa sṛjaty ā́po vaí śāntā́ḥ śāntā́bhir evā́syai śúcaṁ śamayati...

掘るということは、この（大地）に対して粗暴に振る舞うようなものである。水を注ぐ。水は実に鎮められたもの。即ち、静められた水で彼はこの（大地）の痛みを鎮める。

KS 19.5 (5.10-11), KapS 30.3 (140.17-18)

yad ājyena juhuyāc chucā pṛthivīm arpayed apo ninayati śāntyā anuddāhāya[11]

もし液状バターを献供するなら、大地に痛みをもたらすことになる。水を注ぐ。鎮める為に。焼かない為に。

MS 3.1.5 (7.1-2)

yád ghṛténa juhuyā́ñ śucémā́m arpayed átha yád apá upasṛjáti śamáyaty evá

液状バターを献供すると、この大地に痛みをもたらすことになる。それで水を注ぐことで、即ち、鎮めるのである。

ŚB 6.4.3.1-5

átha tátrāpá upanínayati | yád vā́ asyaí kṣatáṃ yád víliṣṭam adbhír vaí tát sáṃdhīyate 'dbhír evā̀syā etát kṣatáṃ víliṣṭaṁ sáṃtanoti sáṃdadhāti ‖ 1 ‖ apó devír úpasṛja | mádhumatīr ayakṣmā́ya prajā́bhya íti ráso vaí mádhu

すり鉢とすりこぎで、2つの石臼で、（穀物）献供を殺しているのだ。

[10] ukhā を作るための土を掘り出す。

[11] KapS—anirdāhāya

rásavatīr ayakṣmatváya prajā́bhya íty etát tā́sām āsthā́nād újjihatām óṣadhayaḥ supippalā́ íty apā́ṃ vā́ āsthā́nād újjihata óṣadhayaḥ supippalā́ḥ ‖ 2 ‖ áthainām vāyúnā sáṃdadhāti | yád vā́ asyaí kṣatáṃ yád víliṣṭaṃ vāyúnā vaí tát sáṃdhīyate vāyúnaivā̀syā etát kṣatáṃ víliṣṭaṁ sáṃtanoti sáṃdadhāti ‖ 3 ‖ sáṃ te vāyúr mātaríśvā dadhātv íti | ayáṃ vaí vāyúr mātaríśvā yò 'yáṃ pávata uttānā́yā hṛ́dayaṃ yád víkastam íty uttānā́yā hy àsyā etád dhṛ́dayaṃ víkastaṃ yó devā́nāṃ cárasi prāṇáthenéty eṣá hí sárveṣāṃ devā́nāṃ cárati prāṇáthena kásmai deva váṣaḍ astu túbhyam íti prajā́patir vaí kás tásmā evaìtád imā́ṃ váṣaṭ karoti nò haitā́vaty anyā́hutir asti yáthaiṣā́ ‖ 4 ‖ áthainām digbhíḥ sáṃdadhāti | yád vā́ asyaí kṣatáṃ yád víliṣṭaṃ digbhír vaí tát sáṃdhīyate digbhír evā̀syā etát kṣatáṃ víliṣṭaṁ sáṃtanoti sáṃdadhāti sá imā́ṃ cemā́ṃ ca díśau sáṃdadhāti tásmād eté díśau sáṁhite áthemā́ṃ cemā́ṃ ca tásmād v evaìté sáṁhite íty ágre 'théti áthéty áthéti tád dakṣiṇāvṛ́t tád dhí devatrā̀náyānáyā vaí bheṣajáṃ kriyate 'náyaivaìnām etád bhiṣajyati ‖ 5 ‖

(1) 次にそこに水を注ぎ入れる。この大地で傷つけられ、損なわれた物は全て、水で癒されるので。即ち、この大地で傷つけられ、損なわれた物を全て、水で繕い癒す。

(2)「神聖なる蜜の如き甘き水を注げ、無病の為に、生殖の為に」と唱える。蜜とは実にエキス。エキスたっぷりのものを無病の為に、生殖の為に、という意味。「それらの場所から良い実をつける植物が発生せよ」と唱える。実に、水の場所から良い実をつける植物が発生する。

(3) 次に、それを風で癒す。この大地で傷つけられ、損なわれた物は全て、風で癒されるので。即ち、この大地で傷つけられ、損なわれた物を全て、風で繕い癒す。

(4)「ヴァーユ・マータリシュヴァンが汝の」と唱える。実にこの吹いているものがこのヴァーユ・マータリシュヴァン。「上に向かって裂けている損なわれた心臓を繕わん」と唱える。これはこの（大地の）上に向かって裂けている損なわれた心臓なので。「汝、神々の息で動く者」と唱える。この者は一切の神々の息で動くので。「汝の為に ka の為に、神よ、ヴァシャットがあれ」と唱える。ka とは実にプラジャーパティ。即ち、彼の

為にここでこの大地をヴァシャットにする。他にこの様な献供は無いので。(5) 次に、それを諸方位で癒す。この大地で傷つけられ、損なわれた物は全て、諸方位で癒されるので。即ち、この大地で傷つけられ、損なわれた物を全て、諸方位で繕い癒す。この方位とこの方位をまとめる。するとこれら 2 つの方位はひとまとまりになる。次にこれとこれを。するとこれら 2 つはひとまとまりになる。まずこうして次にこうする。次がこうでその次がこう。それは右方向への動き。それは神々へ向かうので。即ち、これとこれで癒しがなされる。即ち、これで今この大地を癒す。

TS では大地に痛みを齎すのは掘るという行為だが、KS と MS では液状バターの献供が原因とされている[12]。ŚB では痛みには言及されておらず、癒すための方法に注意が向けられている。

以下の③—⑤はアグニによる痛みである[13]。

③　TS 5.1.4.2, MS 3.1.5 (6.7-8)

TS 5.1.4.2[14]
...kṛṣṇājinéna sám bharati yajñó vaí kṛṣṇājináṃ yajñénaivá yajñáṁ sám bharati yád grāmyáṇām paśūnáṃ cármaṇā sambháred grāmyán paśūñ chucárpayet kṛṣṇājinéna sám bharaty āraṇyán evá paśún ‖ 2 ‖ śucárpayati tásmāt samávat paśūnám prajáyamānānām āraṇyáḥ paśávaḥ kánīyāṁsaḥ śucá hy ṛtá...
黒レイヨウの皮により（アグニを）集める。黒レイヨウの皮は実に祭式で

12 液状バターはヴァジュラと等置されることがある（ŚB 7.5.2.24）。またラクシャスから祭式を守る為の手段の一つである。TS 5.2.7.5, MS 3.2.6 (24.1-5), TS 6.3.2.2。伊澤 2007, p. 59.

13 アグニが生まれる際に世界や生類を傷つけるという考え方は随所に見られる。TS 5.1.4.1, MS 3.1.4 (5.16-19), TS 5.2.2.3, ŚB 6.8.1.9

14 掘り出した土を黒レイヨウの皮の上に置く。

ある。即ち、祭式により祭式を集める。もし家畜達の皮で集めるなら、家畜達に痛みをもたらすだろう。黒レイヨウの皮で集める。即ち、野生の動物達に痛みをもたらす（2）。それ故、同じ様に生まれ来つつある動物達の中でも、野生獣達はより小さいのである。痛みを受けるので。

MS 3.1.5（6.7-8）

kṛṣṇājinéna sáṃbharaty eṣá hí paśūnám anupajīvanīyátamó 'tho āraṇyán evá paśúñ śucárpayati

黒レイヨウの皮により集める。何故なら、それは動物達の中でも最も多産でないので。そしてまた、他ならぬ野生獣達に痛みをもたらす。

対処法として示されるのは、野生獣の皮を使用することで、家畜ではなく野生獣に痛みを向かわせるというもの。

KS と ŚB にはこの痛みについての言及はない。

④　TS 5.1.6.1-2, KS 19.5-6（6.14-7.2）＝KapS 30.3-4（141.16-22）

TS 5.1.6.1-2[15]

vāruṇó vā́ agnír úpanaddho ví pájaséti ví sraṁsayati savitṛ́prasūta evā́sya víṣūcīṃ varuṇameníṃ ví sṛjaty apá úpa sṛjaty ā́po vaí śāntā́ḥ śāntā́bhir evā́sya śúcaṁ śamayati tisṛ́bhir úpa sṛjati trivṛ́d vā́ agnír yā́vān evā́gnís tásya śúcaṁ śamayati mitráḥ saṁsṛ́jya pṛthivím íty āha mitró vaí śivó devā́nāṃ ténaivá ‖ 1 ‖ enaṁ sáṁ sṛjati śā́ntyai yád grāmyā́ṇāṃ pā́trāṇāṃ kapā́laiḥ saṁsṛjéd grāmyā́ṇi pā́trāṇi śucárpayed armakapālaíḥ sáṁ sṛjaty etā́ni vā́ anupajīvanīyā́ni tā́ny evá śucárpayati...

縛られたアグニは実にヴァルナ的。「光と共に」と唱えつつ解く。即ち、サヴィトリの鼓舞のもとこのものの中のヴァルナの天罰を四方に解放する。水を注ぐ。実に水は鎮められている。即ち、鎮められた水でこれの痛みを

[15] 土に他の物を混ぜてまとめる。

鎮める。3 詩節と共に注ぐ。アグニは実に三重。即ち、アグニの大きさほどその痛みを鎮める。「ミトラは大地を混ぜて」と唱える。実にミトラは神々の中でも柔和である（1）。即ち、彼によってそれを混ぜるのである。鎮める為に。もし家庭用の器の破片と混ぜるなら、家庭用の器に痛みをもたらすだろう。割れものの破片と混ぜる。何故なら、これらは実用的な物ではないので。即ち、それらに痛みをもたらす。

KS 19.5-6（6.14-7.2), KapS 30.3-4（141.16-22）

vi pājaseti vi sraṁsayati varuṇamenim eva viṣyaty āpo hi ṣṭhā mayobhuva ity apa upasṛjaty āpaś śāntāś śāntābhir evāsya śucaṁ śamayati tisṛbhis trivṛd vā agnir yāvān evāgnis tasya śucaṁ śamayaty ajalomais saṁsṛjaty eṣā vā agneḥ priyā tanūr yad ajā priyayaivainaṃ tanvā saṁsṛjati śarkarābhir[16] dhṛtyā armyaiḥ kapālais saṁsṛjaty āraṇyān eva paśūñ[17] śucārpayati yad grāmyais saṁsṛjed grāmyān paśūñ śucārpayet[18] tasmād ete samāvat paśūnāṃ prajāyamānānāṃ kaniṣṭhāś śucā hy eta ṛtāḥ ‖ 5 ‖

「光と共に」と唱えつつ解く。即ち、ヴァルナの天罰を解放する。「実に水は喜びの中にある」と唱えて水を注ぐ。水は鎮められている。即ち、鎮められた水でこれの痛みを鎮める。3 詩節と共に。アグニは実に 3 重。即ち、アグニの大きさほどその痛みを鎮める。山羊の毛と混ぜる。雌山羊であるこれは実にアグニの大事な身体である。即ち、大事な身体とそれを混ぜる。砂利と。堅固さの為に。割れ物の破片と混ぜる。他ならぬ野生獣達に痛みをもたらす。もし家庭用の（器の破片）と混ぜるなら、家畜達に痛みをもたらすだろう。それ故、これらは同じ様に生まれつつある動物達の中でも、より小さいのである。何故なら、これらは痛みを受けるので。

対処法として示されるのは、割れ物の破片を土に混ぜることで、家畜ではなく野生獣に痛みを向かわせるというもの。

---

16 KapS—śarkarābhir saṁsṛjati

17 Mittwede 1989, p. 104. Schroeder: pa śañ.

18 KapS—śucārpayati

MS と ŚB にはこの痛みについての言及はない。

⑤　TS 5.2.9.5-6, KS 20.8 (27.19-28.3)＝KapS 31.10 (158.9-15), MS 3.2.7 (27.8-10), ŚB 7.5.2.28-37

TS 5.2.9.5-6[19]

dvipádaś ca cátuṣpādaś ca tán vā́ etád agnaú prá dadhāti yát paśuśīrṣā́ṇy upadádhāty amúm āraṇyám ánu te diśāmīty āha grāmyébhya evá paśúbhya āraṇyā́n paśū́ñ chúcam anút sṛjati tásmāt samā́vat paśūnā́m prajā́yamānānām āraṇyā́ḥ paśávaḥ kánīyāṁsaḥ śucā́ hy ṛtā́ḥ sarpaśīrṣám úpa dadhāti yaívá sarpé tvíṣis tā́m evā́va runddhe ‖ 5 ‖　yát samīcínam paśuśīrṣaír upadadhyā́d grāmyā́n paśū́n dáṁśukāḥ syur yád viṣūcínam āraṇyā́n yájur evá vaded áva tā́ṃ tvíṣiṁ runddhe yā́ sarpé ná grāmyā́n paśū́n hinásti nā́raṇyā́n átho khálūpadhéyam evá yád upadádhāti téna tā́ṃ tvíṣim áva runddhe yā́ sarpé yád yájur vádati téna śāntám ‖ 6 ‖

(5) 動物の頭を置くことで、2 本足も 4 本足も全ての動物達を祭火に捧げる。「私はあなたの為にあの荒野を指し示す」と彼は言う。即ち、村の家畜達から野生獣達に痛みを放つ。それ故、同じように産まれつつある動物達の中で、野生獣達はより小さい。痛みに苛まれているので。蛇の頭を置く。即ち、蛇の中にある光輝を得る。

(6) 動物の頭に向けて置くなら村の家畜達を嚙むだろう。向けないで置くなら野生獣達を嚙むだろう。他ならぬ祭句を唱えるべし。蛇にあるその光輝を得る。家畜達も野生獣達も傷つけない。そういうわけでそれは置かれるべきである。置くことで蛇にあるその光輝を得る。祭句を唱えることで鎮められる。

KS 20.8 (27.19-28.3), KapS 31.10 (158.9-15)

nāntarā paśuśīrṣāṇi vyaveyād adhvaryur yaviṣṭho vai nāmaiṣo'gniḥ prāṇān

[19] 火祭壇を積む場所に ukhā を置き、その中に動物の頭部を置く。

asya yuveta pramīyetaikam upadhāyaitais sarvair upatiṣṭheta tad vā sarvato 'nuparihāraṁ sādayet tenaiva sarvāṇy upadhīyante nārtim āṛchaty adhvaryur na bhreṣaṃ nyety etāvanto vai paśavo dvipādaś ca catuṣpādaś ca tān etac chucārpayaty amum āraṇyam anu te diśāmīti grāmyebhya eva paśubhya āraṇyān paśūñ śucam anūtsṛjati tasmād ete samāvat paśūnāṃ prajāyamānānāṃ kaniṣṭhāś śucā hy eta ṛtāḥ

adhvaryu 祭官は動物達の頭を分けてはならない。最も若いと呼ばれているこのアグニはこれ（adhvaryu 祭官）の諸プラーナを縛って破壊してしまうだろう。一度に置いて、これら全てと共に敬い祭るべし。あるいは、周り中から囲んで据えるべし。即ち、それにより全てが置かれることになる。adhvaryu 祭官は痛みに陥ることはない。迷うことはない。2 本足、4 本足の動物達全てにこの痛みを齎す。「私はあなたの為にあの荒野を指し示す」と唱えて、痛みを家畜から野生動物へ放逐する。それ故、これらは同じように生まれつつある動物の中でもより小さい。これらは痛みに苛まれているので。

MS 3.2.7（27.8-10）

yáviṣṭho vaí námaiṣò 'gnís tásmāc cinvatā́ntarā́ ná vyètavaí yád vīyā́t prāṇā́n asya yuvetotsargaír upatiṣṭhata āraṇyā́n evá paśū́ñ śúcam anū́tsṛjati

このアグニは最も若いと呼ばれている。それ故、積む者によって分けらるべきでない[20]。もし分けるなら、彼の諸プラーナを縛ってしまうだろう。utsarga 詩節（VS 13.47-51）によって敬い祭る。即ち、痛みを野生の動物達に向けて放つ。

ŚB 7.5.2.28,31,37

áthotsargaír úpatiṣṭhata | etád vaí yátraitā́n prajā́patiḥ paśū́n álipsata tá

[20] Mānava Śrautasūtra 6.1.7.28

abhita itarāṇi parihāraṁ spṛṣṭvety ukhāyāṁ śravaṇakhair hanubhiḥ pratiṣṭhitāni...

（人頭の）周りにくっつけて他の（動物達の頭）が耳の穴とあごを下にして置かれる。

ālipsyámānā aśocaṃs téṣām etaír utsargaíḥ śúcaṃ pāpmánam ápāhaṃs táthaivaìṣām ayám etád etaír utsargaíḥ śúcaṃ pāpmánam ápahanti ‖ 28 ‖
báhyenaivā̃gním útsṛjet | imé vaí lokā́ eṣò 'gnír ebhyás tál lokébhyo bahirdhā́ śúcaṃ dadhāti bahirvedī̃yaṃ vaí védir asyaí tád bahirdhā́ śúcaṃ dadhāty údaṅ tíṣṭhann etásyāṁ ha diśy èté paśávas tád yátraité paśávas tád evaìṣv etác chúcaṃ dadhāti ‖ 31 ‖
tád āhuḥ | yā́ṃ vaí tát prajápatir etéṣāṃ paśūnā́ṁ śúcaṃ pāpmánam apā́haṃs tá eté páñca paśávo 'bhavaṃs tá etá útkrāntamedhā amedhyā́ ayajñiyā́s téṣām brāhmaṇó nā̃śnīyāt tā́n etásyāṃ diśí dadhāti tásmād etásyāṃ diśí parjányo ná várṣuko yátraité bhávanti ‖ 37 ‖
28）次に utsarga 詩節によって敬い祭る。プラジャーパティが実にこれらの動物達を殺そうと欲した時、それら（動物達）は殺されつつ、痛みを感じた。これらの utsarga 詩節によってそれらの痛み、悪を取り除いた。正に同様にこの者は今これらの utsarga 詩節によってそれらの痛み、悪を取り除く。
31）痛みは祭火壇の外に放つべし。この祭火壇はこれら諸世界。その様にこれらの諸世界の外に祭壇の外に痛みを置く。祭壇は実にこの大地。その様に大地の外に痛みを置く。北を向いて立って。この方角にこれらの動物達がいるので。その様にこれらの動物達がいるそこでこれらの痛みを置く。
37）それについて彼らは言う。「実にプラジャーパティが排除したこれらの動物達の痛み、悪はこれら 5 頭の動物達となった。それらは真髄が去って、不浄であり、祭式に相応しくない。バラモンはそれらを食べるべきでない。彼はそれらをその方角に置く。それ故、これらがいる方角では Parjanya[21]は雨を降らさない。

saṃhitā では動物の痛みはアグニによってもたらされるが、ŚB ではプラジャーパティによって殺されることが原因となっている。そしてそこでは痛みは悪と言い換えられており、人（puruṣa）から馬（aśva）、雄牛（go）、

[21] 雨の神、又は雨雲。家畜の繁殖にも関わる。Keith 1925, pp. 140-141 参照。

羊（avi）、雄ヤギ（aja）という順に、その痛みを utsarga 詩節によって放つ（ŚB 7.5.2.32-36）。
ところで 5 頭の家畜達について、ŚB はプラジャーパティによって排除された痛みと悪がそれらになったということ、不浄であり、祭式に相応しくないので食べてはならないということを述べている点は注目すべきである。

3

これまで上げた例についてまとめると―
(1) 犠牲獣は祭式に導かれるのであって、死に導かれるのではない、とする ŚB は TS の「犠牲獣は死へと導かれる」という考え方を念頭においてそれを否定していると考えられる（A）。
(2) Saṃhitā では鎮めの手段である水が、ŚB 3.8.2.4 では不死のための手段に変わっている（B ①）。
(3) 不死や再生を唱える ŚB であるが、同時に殺す（$\sqrt{\text{han}}$）という表現を使用しているのも目立つ（B ①）[22]。
(4) Saṃhitā では、殺生行為以外の祭式行為による（従って罪悪感や恐れの感情を比較的伴いにくいと思われる）痛みに対する共感が見られ、それを解消するためのきわめて呪術的な方法が提示されるのに対して（B ②③④⑤）、ŚB は痛みに言及しないことが多く、癒すための方法としてマントラを唱えることに重点が置かれている（B ②⑤）。
(5) ŚB 7.5.2.28-37 では痛みが悪と言い換えられる。5 頭の家畜達については、プラジャーパティによって排除された痛み、悪がそれらになったということ、そして不浄であり、祭式に相応しくないので食べてはならないということが述べられている（B ⑤）。

ŚB が不死や再生を強調するのは祭式の威力・効用への信頼が前提とな

[22] 動物供犠において、ŚB の時代になると実際の殺生は行われなかったと考えられるが、意外にも殺生場面の描写が Saṃhitā よりも露骨であること、また犠牲獣を不死や再生に結び付ける考え方は ŚB に顕著である。伊澤 2004, p. 140-105 参照。

っており、また罪の意識を解消し内外からの批判をかわす目的が想定しうるが、必ずしも殺生の打ち消しの為とは限らない。不死そのものを標榜し、下降しつつある祭式の権威を立て直すという意図も汲み取れる[23]。

Saṃhitā においてはその点に関してまだ無防備で祭式の権威は健在であったと思われる。そして殺生行為と（殺生行為が原因であるとは限らない）痛みに対する共感が共存していた。この共感はしかし、やがて原始的で幼稚な感覚と看做され軽視されたのかもしれない。少なくとも ŚB においてはそれまでの共感が変形し、目立たなくなっている。

この痛みに対する共感は呪術的な対処法を伴っており[24]、祭式そのものに組み込まれている観があり、また祭式を祭式たらしめている等置化の思考法と相通ずるものがある。等置化は祭式における代用を可能にし、それにより祭式は犯罪（殺人）から免れたものの[25]、その結果動物の殺生を引き起こすことになった。等置化はまた祭式の簡素化を招き[26]、それは祭式の衰退を招く原因の一つにもなったが、一方で祭式の内面化を可能にし、等置化の思考法そのものはその過程でむしろ強化された。一方の共感もまた同様の運命にあるように思われる。ŚB には祭式の衰退と共に廃れていく兆しが見えるが、同時に恐れや不安と言った感情と結び付き、さらには倫理観を伴って後に再浮上してきたという可能性も考えられる。

Saṃhitā に見られる痛みなどに対する共感は現代人には理解しにくい側

---

[23] Veda 祭式における殺生行為に関する時代毎の議論については Houben, pp. 105–183 を参照。特に Kumārila (ca. 600–650 AD) 及びその前後のミーマーンサ学派等と仏教徒との間の議論については Halbfass, pp. 87–129, Kataoka, K. “Is Killing Bad ? Dispute on Animal Sacrifices between Buddhism and Mīmāṃsā” (Professor Aklujkar の commemoration volume に掲載予定) を参照。

[24] Frazer によって知られる共感呪術 sympathetic magic に似ているが、彼が挙げている夥しい共感呪術の例は、全て自身や自身の家族等に福を齎すか或いは敵に災いをなすものである。呪術と宗教（祭式）との関係については、呪術を先行するものとし、2 つが混交していた時代があったとしている。Frazer, pp. 52–243.

[25] 本来動物供犠の犠牲は祭主自身であり、それを他の動物で代用している。Thite, pp. 146–148, Heesterman 1987, p. 92ff., Smith and Doniger, pp. 189, 193.

[26] Smith and Doniger, p. 205.

面を持っており、時代と共に省みられなくなったとしても不思議ではない。しかも動物殺生を許容する祭式に密接に結びついた感覚だとすると、その時点では倫理観とは無関係であったと考えられる。しかし、現代人にとっても、このような感覚を幼稚で劣ったものとして切り捨てることにより失うものは大きいと言えるだろう。

（略号および使用テキスト）

KapS　*Kapiṣṭhala-Kaṭha-Saṃhitā, A Text of the Black Yajurveda*, Ed by Raghu Vira, (Mehar Chand Lachhman Das Sanskrit and Prakrit Series Vol. 1). Lahore, 1932.

KS　*Kāṭhaka, die Saṃhitā der Kaṭha-Śākhā*, Herausgegeben von Leopold von Schroeder. Wiesbaden, 1971.

MS　*Maitrāyaṇī Saṃhitā, die Saṃhitā der Maitrāyaṇīya-Śākhā*, Herausgegeben von Leopold von Schroeder. Wiesbaden, 1972.

RV　*Ṛgveda with the Padapāṭha and the available portions of the Bhāṣya-s by Skandasvāmin and Udgītha, the Vyākhyā by Veṅkaṭamādhava and Mudgala's Vṛtti based on Sāyaṇa-bhāṣya*, 8 vols, Ed. by Vishva Bhandhu, (Vishveshvaranand Indological series, 19-26). Hoshiarpur, 1963-1966

TS　*Die Taittirīya-Saṃhitā*, Erster Theil, Herausgegeben von Albrecht Weber, (Indische Studien 11). Leipzig, 1871.

Die Taittirīya-Saṃhitā, Zweiter Theil, Herausgegeben von Albrecht Weber (Indische Studien 12). Leipzig, 1872.

The Taittirīyā Saṃhitā of the Black Yajurveda with the commentary of Bhaṭṭa Bhāskara Miśra, Ed. by A. M. Sastri and K. Rangacharya. Delhi, 1986.

（参考文献）

Alsdorf, L.　[1962] *Beiträge zur Geschichte von Vegetarismus und Rinderverehrung in Indien.* Akademie der Wissenschaften

und der Literatur Jg. 1961, Nr. 6, pp. 557-625. Wiesbaden.

Bodewitz, H. W.　〔1999〕"Hindu Ahiṃsā and its Roots." In *Violence Denied*, pp. 17-41. Leiden.

Eggeling, J.　〔1988〕 *The Śatapatha-Brāhmaṇa*, Part II (The Sacred Books of the East 26). Delhi.

—　〔1989〕 *The Śatapatha-Brāhmaṇa*, Part III (The Sacred Books of the East 41). Delhi.

Frazer, J. G.　〔1917〕The Golden Bough: A Study in Magic and Religion, part 1 The Magic Art and the Evolution of Kings, vol. 1. Reprint of 3rd ed.. London.

和訳　神成利男 訳『金枝篇：呪術と宗教の研究　第１巻　呪術と王の起源　上』国書刊行会, 2004.
永橋卓介 訳『金枝篇（一)』岩波文庫, 1986.

Gonda, J.　〔1959〕 *Four Studies in the Language of the Veda.* The Hague.

Halbfass, W.　〔1991〕 *Tradition and Reflection: Explorations in Indian Thought.* Albany.

Heesterman, J. C.　〔1984〕 "Non-violence and Sacrifice," *Indologica Taurinensia*, vol. XII, pp. 119-127.

—　〔1987〕"Self-Sacrifice in Vedic Ritual." *Gilgul: Essays on Ttransformation, Revolution and Permanence in the History of Religions*, pp. 91-106. Leiden.

Houben, J. E. M.　〔1999〕"To Kill or not to Kill." In *Violence Denied*, pp. 105-183. Leiden.

伊澤敦子　〔2004〕「ソーマ祭の動物供犠における殺生行為と解釈について」『国際仏教学大学院大学研究紀要』第７号, pp. 182-162.

—　〔2007〕「黒ヤジュル・ヴェーダ・サンヒターにおけるラクシャス」『国際仏教学大学院大学研究紀要』第 11 号, pp. 66-34.

Keith, A. B.-1 〔1967〕 *The Veda of the Black Yajus School entitled Taittiriya Sanhita, part 1: kāṇḍas I-III* (Harvard Oriental Series 18). Delhi.

Keith, A. B.-2 〔1967〕 *The Veda of the Black Yajus School entitled Taittiriya Sanhita, part 2: kāṇḍas IV-VII* (Harvard Oriental Series 19). Delhi.

Keith, A. B. 〔1976〕 *The Religion and Philosophy of the Veda and Upanishads* (Harvard Oriental Series 31). Delhi.

Mittwede, M. 〔1986〕 *Textkritische Bemerkungen zur Maitrāyaṇī Saṃhitā* (Alt- und Neu-Indische Studien 31). Stuttgart.

— 〔1989〕 *Textkritische Bemerkungen zur Kāṭhaka Saṃhitā* (Alt- und Neu-Indische Studien 37). Stuttgart.

Schmidt, H.-P. 〔1968〕 "The Origin of Ahiṃsā." In *Makaranda (Madhukar Anant Mehendale Festschrift)*, pp. 17-28. Ahmedabad.

— 〔1997〕 "Ahiṃsā and Rebirth." In *Inside the Texts Beyond the Texts*, pp. 207-234. Cambridge.

— 〔2000〕 "How to Kill a Sacrificial Victim." In *Mélanges d'Indianisme, à la Mémoire de Louis Renou*, pp. 625-655. Paris.

Schmithausen, L. 〔2000〕 "A Note on the Origin of Ahiṃsā," *Harānandalaharī : Volume on Honour of Professor Minoru Hara on his Seventieth Birthday*, pp. 253-282. Reinbek.

Smith, B. K. and Doniger W. 〔1989〕 "Sacrifice and Substitution: Ritual Mystification and Mythical Demystification," *Numen*, vol. XXXVI, Fas. 2, pp. 189-224.

Thite, G. U. 〔1970〕 "Animal Sacrifice in the Brāhmaṇatexts." *Numen*, vol. XVII, Fas. 2, pp. 143-158.

Tsuchida, R. 〔2000〕 "Ahiṃsā in the Life of Brahmanical Householders," *Harānandalaharī: Volume on Honour of Professor Minoru Hara on his Seventieth Birthday*, pp. 411-432. Reinbek.

Summary

Empathy for Pain in Vedic Ritual

Atsuko Izawa

Speaking of fear as one of the motives of non-violence (*ahiṃsā*), L. Schmithausen quite aptly points out that '*fear* presupposes at least an inkling of *empathy*'. The German scholar further argues that in the *Brāhmaṇa*, empathy has the same source as fear and embarrassment, and it also provides the basis of concern or merciful sympathy (*dayā*) and caring for others (*anukampā*) in Buddhism. How is empathy treated in the Vedic *Saṃhitā ?* This is the topic which I explore in this paper by comparing the Black Yajur Veda texts with the Śatapatha Brāhmaṇa.

In his study on the origin of *ahiṃsā*, H.-P. Schmidt adduces some Vedic sources which deal with specific methods meant to eliminate the act of sacrificial killing or appease its victims. These are divided into two groups:

A. Verbal formulae declaring that the victims will be reborn from the sacrificial fire, etc.

B. Acts aimed at an immediate elimination of killing and harming, i.e., appeasing (*śānti*), or symbolic identifications aimed at avoiding any injury.

In the present paper, I adopt the same frame of analysis. Type A of ritual avoidance is found at Śatapatha Brāhmaṇa 3.8.1.2. as well as at its parallel passages at Taittirīya Saṃhitā 6.3.8.1.-2. According to Schmidt, the acts of appeasing linked to Type B apply not only to the pains of the sacrificial victims but also to all entities which might be injured during the ritual, such as the earth, trees, and grains. In order to understand the actual methods of alleviating the suffering of the victims, I first look at Maitrāyaṇī Saṃhitā 3.10.1. Then I turn my attention to several other passages dealing with ways of avoiding types of pain to be caused by other than killing. Here are the main

conclusions yielded by my investigation.

(1) The Taittirīya Saṃhitā instruction 'they lead the victim into death' is denied and becomes rephrased in the Śatapatha Brāhmaṇa as 'they lead the victim to the sacrifice'.

(2) In the *Saṃhitā*, the water is a means of appeasing. In the Śatapatha Brāhmaṇa its function changes into a means of attaining immortality.

(3) It is true that the Śatapatha Brāhmaṇa stresses the ideas of immortality and rebirth, but one can also find the word 'to kill' ($\sqrt{han}$) frequently mentioned.

(4) In the *Saṃhitā*, we find examples of empathy for the "pain" of the earth, trees, animals and so on, which may have been inflicted during the ritual act. This feeling is not accompanied by a sense of fear. In such cases, the method of eliminating pain is of a purely magical nature. The Śatapatha Brāhmaṇa mentions pain less frequently than the *Saṃhitā*, and attaches greater importance to the recitation of mantras as a way of removing the pain.

(5) Śatapatha Brāhmaṇa 7.5.2.28–37. juxtaposes the word 'pain' and 'evil'. It furthermore states that the five domestic animals (man, horse, bull, sheep, he-goat) actually represent a transformation of the pain, evil which was eliminated by Prajāpati. They are, therefore, pithless and unfit for rituals as well as consumption.

Prima facie, it would seem that the emphasis placed by the Śatapatha Brāhmaṇa on immortality presupposes firm faith in the power and efficacy of the ritual, and that its authors felt the need to rid themselves of the sense of guilt or eschew the criticism of the ritualists from inner and outer circles. This, however, is not the whole truth. One can also detect an intention on the part of the Śatapatha Brāhmaṇa authors to bring immortality to the fore of their doctrinal agenda and to re-build the authority of the declining authority of the ritual in new terms.

In the *Saṃhitā* the authority of the ritual reigns unchallenged. It is against this religious background that we witness the co-existence of the killing of

animals and the occasional empathy for pain, empathy which is not necessarily caused by an actual act of killing. This feeling of empathy probably later became regarded as primitive and infantile, and even came to be despised. This is at least the impression one gets by looking at the Śatapatha Brāhmaṇa where empathy had undergone a considerable metamorphosis and anyway had become much less conspicuous.

This kind of empathy is accompanied by magical elements and seems to have become included in the ritual itself. It also shares common characteristics with an analogous mode of thinking which establishes various symbolic identifications and defines the very nature of ritual. This analogous mode of thinking made the substitution of human sacrifices with animal sacrifices. It also made possible the distinction between sacrifice and crime (murder). Paradoxically, in the long run, the analogous mode of thinking also generated a trend of simplification which eventually became one of the factors responsible for the decline of ritual. It actually opened the gates for the process of the internalisation of the ritual, in which the analogous mode of thinking itself was further developed and strengthened. And it seems that the early Vedic feeling of empathy trod the same path. In the age when the Śatapatha Brāhmaṇa was being compiled, it would have seemed that empathy was about to share the same destiny with that of the ritual, whose popularity was already on the wane. Empathy, however, became associated with fear and anxiety, and would later resurge as a new and key ethical concept.

Library Staff,
International College
for Postgraduate Buddhist Studies